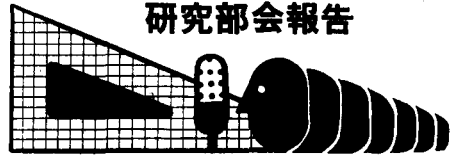


研究部会報告



●未来分析●

●第9回

1983年11月26日(土) 14:00~17:00 場所：東京都勤
労福祉会館 参会者：10名

議題：「未来論のとらえ方——21世紀への課題——プ
ロジェクトに当たっての所見」総合研究開発機構

大内 浩

未来分析に当たっては、「トレンドオリエンテッド」「ビジョンオリエンテッド」「プロブレムオリエンテッド」といろいろ考えられるが、最後の「プロブレムオリエンテッド」が主体とならねばならないことが結論づけられた。今後わが国がかかえるであろう課題を探りあてることによって大まかな社会の変動をとらえる道具にしようというもので、未来のことを考えるうえにきわめて示唆に富むものであった。

●数理計画(九州)●

●第4回

日時：10月22日(土) 場所：九州大学理学部数学教室
出席者：15名

題目：(1)「Max-min 非可換連続関数の構成について」

久野 洋(九州大学理学部)

いわゆるミニマックス定理は凹凸性のもとで $\min \max = \max \min$ を主張し、利害が対立する2者間に1つの解決を与えている。本報告では、これと逆に、3変数以上の関数に対してすべての逐次あるいは交互ミニマックス値が異なるような関数を具体的に構成し、そのOR的意義を論じた。

(2)「多目的計画問題におけるベクトル値ラグランジュ関数の性質について」前田隆(長崎大学商業短期大学部)

多目的計画問題に対しベクトル値ラグランジュ関数、鞍点、およびミニマックス解を定義し、3者間の相互依存関係を、スカラー値の場合と平行して調べた。

●待ち行列システム●

●第8回

日時：1983年12月10日(土) 14:00~16:00

場所：東京工業大学(情報科学科会議室)，出席：24名
テーマと講師：

• Q S 8-1 割込み優先権のある混合入力トラヒックモデルの解析 (住田修一・武蔵野通研)

ポアソン呼が割込み優先権をもつ $M_1, GI_2/M_1, M_2/1$ モデルの解析と数値例の報告

• Q S 8-2 Conservation law について
(宮沢政清・東京理科大)

待ち行列理論における Conservation law (保存則) の定義が文献ごとに異なることの指摘と新しい定義の提案, およびその定義による invariance relation の説明

■経営研究■ (研究グループ)

• 第8回

日時: 11月5日(土) 14:00~17:00 場所: 東京都勤労福祉会館

テーマ: 「ローカルエリア・ネットワークの課題」

講師: 梨山 修 (経営コンサルタント・産能大講師)

コモン・キャリアーに専念していた電々公社が, 今回

ひとつの飛躍をして「LAN: ローカル・エリア・ネットワーク」に積極的に進出することになった。そこで、コミュニケーション・ネットワーク全体とLANとの関係や界面をいかにうまくこなして、情報化時代の要請にこたえるかをマイクロとマクロ、そして、現在と将来にわたって展望し解説された。

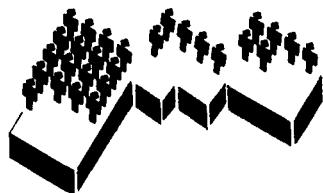
• 第9回

日時: 12月3日(土) 14:00~17:00 場所: 東京都勤労福祉会館

テーマ: 「経営実践報告」

講師: 村沢与四郎 (中電電気産業㈱社長)

アセンブルを主体とする大手企業と部品やコンポーネントの専門・専業メーカーとのそれぞれの役割りやあり方や相互関係の現状を概観し、その問題点を一企業の社長という立場から、そして日本の経済全体の枠組のなかで具体的に、かつ前向きな視点でとらえられ、さらに将来のよりよき経済への有効な提言の数々が開陳され、また現実の企業活動のORにも言及された。



会員近況

(元 日新製鋼) 山本 昌

呉製鉄所(工程部長)のとき、権藤 元氏より「広島でのOR学会で何か発表を」と希望があったので、日ごろ考えていたことをまとめて「ある人工語の試み」なる小冊子を印刷して出席の皆様にお配りして発表したのが、そもその始まりです。その後阪神製造所(副所長)、徳山(モーターボート製造会社の社長)と忙しく、そのままになっていたのを退職を機会にまとめて「言語工学(パジョロール言語)」として希望者に配布しました。それに対していろいろご意見がよせられました。

まず江副 力氏より「右脳を使ったものにしては……」と参考書まで送っていただきました。そこで気づいたことは、言語をある連想しやすい体系に組むことは、同時に一定の方法【誘撃法(OR誌)第19巻(1975, 12)参照】で表意文字化できるということでした。

次は高岡市の宮本一郎氏より「人工語はちょっとした

小説が訳せるぐらいでなければ……」との忠告でした。それには常用4000語程度は全部単語として含まれている必要があります。この作業は真に重労働であって長期間を必要としましたが、無職である暇が幸いして、全部トレースすることができました。これによって充足性が保証できました。また国澤清典先生から習った情報理論のもとに文字が常用漢字と同数の2000字程度におさまるよう工夫しました。以上のようにしてできあがったのがこの「解析言語」です。使われている直感文字は表意文字であると同時に表音文字でもあります。ここに会員の方々にお礼申し上げる次第です。さて発展途上国の人々が日本語を学ぶことは大変なことです。またわれわれがその国の言葉を習うことも大変なことです。英語などによる方法は彼らが文化的に植民地の立場から脱出できないことにつながります。そこで、この簡単に習得できる「解析言語」によって、これらを解決しようというのが第1のねらいです。

次にこの「解析言語」はコンピュータのソフトウェアを開発してゆくときに、いろいろなヒントを教えてくださいと確信しております。ぜひ一読して利用されることをおすすめいたします。本書をご希望の方は、送料250円(切手)をそえて直接下記にお申し込みください。

〒565 吹田市千里山西1丁目26-15 山本 昌